

日本都市計画学会北海道支部では、平成31年2月28日に、札幌市内において、平成30年度第二回都市地域セミナーを開催しました。今回はこの4月19日にオープン予定の安平町の「道の駅あびら D51ステーション」をテーマに取り上げました。

この道の駅には「鉄道資料館」が作られて蒸気機関車D51が保存される予定で、また隣接して、北海道鉄道観光資源研究会のクラウドファンディングを活用した事業で特急気動車「キハ183」という鉄道車両が保存されることになっています。

このような外部からのまちづくり支援は、都市計画学会としても興味深く、その内容についてご紹介します。

クローズアップ①

鉄道遺産・鉄道資産を生かしたまちづくり

～平成30年度第二回都市地域セミナー

公益社団法人日本都市計画学会北海道支部 副支部長 小松 正明

【講演1】

「鉄道文化をシンボル化した道の駅あびらD51ステーション構想」

岡 康弘 氏（安平町地域推進課 道の駅経営推進グループリーダー）

安平町は、千歳市の右側に位置しており、平成18年に追分町と早来町が合併してできた町です。追分町の歴史は明治25年に夕張線と室蘭線の分岐点に追分駅ができたことで発展を始めました。

追分駅には機関区が設けられて蒸気機関車のメッカとなり、国鉄最後のSLが走った場所としてSLファンの聖地でもあります。しかし1987年の国鉄分割民営化と時を同じくして、夕張線の石炭列車も廃止され、急激な人口減少が始まり、次第に鉄道文化は町民から薄れていきました。旧追分町時代の最後には「鉄道文化村構想」が打ち出されましたが、早来町との合併前で着手できず、その事業構想は合併後には政策順位が低いまま先送りされてきました。



それが前町長の滝町長の時代に、「人口減少を食い止めるためにも、地域の有効資源を集中的に発信して、交流人口を増やし、活性化したい」と、旧追分地区での道の駅構想として浮かび上がり、道の駅と鉄道資料館を一体施設化した「回遊・交流ステーション構想」が策定されます。しかし町民や議会からは、「今さら道の駅とは二番煎じだ」などの反対意見も多く、2017年度の当初予算は賛否が拮抗するギリギリの承認となりました。

実際この段階では、町が先行して鉄道文化を残すためのハード施設を先行させても、行政にも町民にも、もう地域資源である『鉄道文化』は失われていたと思います。つまり、施設をつくった先にどうしたらよいか、という発想もなかったのです。

ところがまさにそういう時に、私の後に講演をする矢野さんから「国鉄で退役する車両を購入して保存したいが安平町では協力してもらえないか」という電話が来ました。そしてこの出会いによって、新たな展開に道を開くことができたのです。



【講演 2】

「安平町の道の駅で鉄道車両を保存するクラウドファンディング」

矢野 友宏 氏（北海道鉄道観光資源研究会 事務局次長）

私は、北海道鉄道観光資源研究会に所属して、『往年の名特急おおぞら』の車両『キハ183』の初期型先頭車両を、色も旧国鉄の特急色に塗り直して保存しよう、という提案をしていました。ところが、保存先として声をかけた自治体からはことごとく断られていました。



そのときにNHKの番組で、安平町が保存しているSLを道の駅に移設すると知ったことから、(SLを保管していた車両倉庫が空くならば、そこで保存してもらえないか)と考えて安平町に連絡をしました。

(今回もだめかなあ)と恐る恐る連絡したところ、安平町役場では、教育委員会の担当者だけでなく、思いがけず道の駅建設担当の方まで一緒に参加していただき、最後には「それならば道の駅に置きませんか」という逆提案まで受けました。

どうやら保存場所の確保はできたのですが、問題は費用です。そこで北海道鉄道観光資源研究会では、「北海道鉄道史の誇り。往年の『特急おおぞら』を国鉄色で未来へ」というクラウドファンディングを2018年1月1日から3月30日までの期間で立ち上げました。このプロジェクト初日には、ツイッター等から7,000人という、ものすごいアクセス数を集め、その後も一日数百人というアクセスが続きました。次第にマスコミにも取り上げられて、スタートから1カ月で第一目標額の610万円を突破し、二両目保存のための第二目標1,100万円を越え、最終的には1,386万円まで到達することができました。

こうして保存するための資金が確保できた昨年、再

塗装も完了し、輸送プロジェクト実施直前の平成30年9月6日に、北海道胆振東部地震が発生しました。この地震の影響で、道の駅の施設にも被害が出たため、車両移設は今年の開設後の6月まで延期になってしまいましたが、むしろ新しい話題になると期待しています。

【鼎談】

「安平町の鉄道遺産・鉄道資産を生かしたまちづくり」

上記お二人の講演を受けて、セミナーの後半に、講師お二人と都市計画学会北海道支部幹事松田泰明氏（寒地土木研究所）を加えた3人による鼎談を行いました。

岡氏は、「ネットで発信したことで、安平町の宣伝になり嬉しかった。また矢野さんはほぼ毎日、サイトに話題をアップして世間の関心を引き続けていて、そういう努力が実ったのだと思います」と語り、また矢野氏は、「鉄道ファンなら分かる事柄でも、それを一般の方に分かりやすく伝えることが必要だ」と語りました。

更に、「鉄道観光資源研究会とのつながりで、台湾にもある追分という土地との交流が始まろうとしていて、一つの出会いが新たな展開の扉を開こうとしている」ということで、今後の安平町での道の駅の展開に注目したいところです。

結びに

今回のお話は、合併した安平町がそのアイデンティティを確認するために施設を作る一方で、安平町と北海道鉄道観光資源研究会の思いが合致して、それが幅広く多くの鉄道ファンの共感の心に繋がりが、人の気持ちやお金が動くという、新しい交流や経済の発生が興味深い事例でした。

今回の都市地域セミナーも、北海道鉄道観光資源研究会の皆様には、講師の紹介を始めいろいろご協力をいただき、改めて感謝申し上げます。

